『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』20（2018）：203 － 227

アイヌの樹皮衣と草皮衣

佐藤　雅子

キーワード：樹皮衣，草皮衣，靭皮繊維，アットゥシ，アツシ，厚司，テタラペ

木綿衣以前のアイヌの衣服については attus（オヒョウなどで作られた樹皮衣），tetarape，（イラクサなどで作られた草皮衣），獣皮衣，魚皮衣などがあり，地域により着用する衣服が異なることが知られている。樹皮衣は主に北海道で着用され，草皮衣は樺太で着用されてきた。

樹皮衣と草皮衣は，樹皮から靭皮繊維を取りだして績み，糸にして織り，衣服として着用した，とされる。樹木から樹皮を剥ぐこと，織る事については，細述されていることもあるが，樹皮から靭皮繊維を取りだして績み，糸にする工程については，これまで論じられていない。

本論は，樹皮衣と草皮衣の作成方法である，樹皮から靭皮繊維を取りだして績み，糸にする工程を明らかにし，佐々木（2001:56）の疑問「（アイヌ文化の中で）素材の面から見ると，なぜ，広い自生範囲をもち，比較的利用しやすいイラクサではなく，オヒョウのような木本植物の靱皮を繊維としたのか」を解明することを目的とする。

凡例

文献・引用の原文の〔　〕は筆者注。箇条書きは改行を施し，樹草種名のかなはカナに改めた。文献引用はアツシ，厚司など内容により樹皮衣，草皮衣の区分を判断し，文献通りに記載した。適宜送り仮名を付した。

１．はじめに

attus はアイヌ語である。『アイヌ語千歳方言辞典』[1]では「アットゥシ attus【名】厚司；オヒョウニレなどの木からとった繊維で織った上着。＜at オヒョウニレの木の皮」tus＜rus「毛皮」」であり，知里（1976:166）は「厚司を attus（北海道）或いわ áxrus（樺太）とゆうのわ，たぶん，at-rus（楡皮・衣）の義であろう」と述べている。また，『広辞苑第七版』[2]では，「アツシ【厚子・厚司】①（アイヌ語）オヒョウの樹皮から採った糸で織った織物。又，それで作ったアイヌ

---

[1] 中川（1995:11）

[2] 新村編（2018），以下『広辞苑』とする。

の上衣。（後略）」となっている。

児玉（1969:246-247）は文献の記録からアツシについて，オヒョウ，シナノキ，ハルニレなどで作られたものをアツシと呼ぶ。また，「レタルペはツルウメモドキまたはイラクサの繊維で作られるもので，色がアツシの薄茶色であることに対して白いことが特徴であり，アツシとは当然区別されるものであるが，アイヌ達はムカゴイラクサで作られたものをカパイ・アツシといって，アツシの名称をつけている。カパイはカプ（皮部）・ハイ（繊維）の合成語である。樺太アイヌはアツシをアハルシといい，これは繊維で作った衣服の意であり，それがオヒョウで作られた場合は，オピウ・アハルシといい，エゾイラクサで作ったときは，カー・アハルシという。（中略）アツシ（アツルシ）は樺太アイヌが言うように，「繊維で作った衣服」という一般名で解釈するのが，もっとも合理的でないかと考える」と述べている。そこで本論では「繊維で作った衣服」のうち，オヒョウなどの木本から作られた衣服を「樹皮衣」とし，イラクサなどの草本から作られた衣服を「草皮衣」とする。

木本，草本から樹皮を剥ぎ，樹皮から靭皮繊維を取りだして糸を績み，織り糸とするまでの工程を，アイヌはどのような方法で行っていたのか。靭皮繊維について，靭皮繊維から糸へ，糸を績み，撚（縒）り繋ぎ，樹木・草本の採集から織り糸とするまでを，本州以南の事例と共に，アイヌの樹木・草本の採集から織り糸とするまでを論じ，「オヒョウのような木本植物の靱皮を繊維とし，北海道ではイラクサをあまり使わなかったのか」を解明していく。

２．樹木・草皮から繊維を取り出すための基本情報 ― 靭皮繊維

樹木・草木から繊維を取り出し「布」とするための基本情報を確認していく。

「樹皮 bark：木本植物について，茎のコルク形成層より外側の組織を総称したもの。形成層より外側の，師部・皮膚などの組織も含めていうこともあり，かなり漠然とした内容のものである。コルク組織より外側では水や空気が通りにくくなっており，樹皮の組織の細胞は死んで，外側から順次はげ落ちていく。外側がはげ落ちたあとに，二次師部とその外側の組織が残ることがあり，それを靱皮 bast と呼んでいる。靱皮というのは，もとは茎の周辺から採取される繊維を商業的にいったもので，植物学的には二次師部の部分に相当する」[3]ものである。樹木から樹皮を剥ぎ，靭皮を取り出すのが「布」とする第一段階である。麻類の靱皮も同様である。

---

[3] 下中編（2007:250）『世界大百科事典 13』

第二段階は靱皮から繊維を取り出すことである。第二段階について麻類の靱皮について述べたものであるが，大沼他（1980:69-71）を要約すると「靭皮繊維は，茎幹を強靱にしている組織であり，内部に木質部，外部に表皮細胞を形成したときに作られる。靱皮細胞の間には，リグニン，ペクチンなどのコロイド[4]物質があり，膠着している。ペクチン質の靱皮では発酵によるか，またはアルカリ処理によって繊維群と柔軟細胞の膠着が破壊され，繊維群は集束となって分離する。しかし，繊維間のペクチンはリグニンの少量を含むので抵抗性が大きく溶解しにくいため，繊維個々の分離は難しい」とし，また，河原（2004:146）は，「麻繊維を生産するためには，まず，細胞間を膠着しているペクチン成分を可溶化して細胞間の接合を弱めることが必要である。これをレッティング（retting）という。高温蒸気法，薬品法（アルカリ），発酵法などが用いられる。次に，靱皮部と木質部を破茎機で物理的に分離し，さらに，製綿機にかけて繊維束を靱皮部から分離する」と靭皮繊維の剥離方法を示している。

樹木の靱皮繊維に特化した論考はないが，麻繊維と同様に，高温蒸気法，薬品法（アルカリ），発酵法などが有効なことが考えられる。

３．靱皮繊維から糸へ ― 糸を績む[5]，糸を撚（縒）り[6]繋ぐ

天然繊維を糸にするには，木綿・絹は「紡ぐ」であり，麻・苧などは「績む」という。「紡ぐ」は蚕の繭から糸を長く引き伸ばして細くしていく動作であり，糸をこのまま引き伸ばし続けると切れてしまうので，少しずつＳかＺの撚りを加えて糸にしていくことが紡ぐである。

「績む」について「績むという動詞は現在では日常に使うことはない。なぜなら，績むという言葉が樹皮や草皮の繊維の糸を作る時の動作であり，これらを糸にすることが今では我々の周辺にすっかり見られなくなったからである」と長野・ひろい（1999: 300-301）は前置きし，績むについて次のように定義する。

> ある一定の長さの細いテープ状に裂いた繊維の端に次の繊維を撚り繋いでいき，１本の長い糸にすることである。これには撚りはかかっておらず，必要であればこのあとで全体に撚りをかける。繊維は常に１本かまたは２本で撚り繋いでいき，長繊維はなるべく長いま

---

[4] 膠質『広辞苑』

[5] うむ【績む】麻・苧などを細く裂き，長く繋いでより合わせる。『広辞苑』

[6] よる【縒る・撚る】①複数の細長いものをまじえてねじり合わせる。糸状のものをねじる。『広辞苑』

ま，しかし人間が扱いやすい最大の長さつまり両手を広げた１ヒロ（尋）くらいで扱うことが多い。撚り繋ぎ方にはいくつかあり，経糸に適した方法と緯糸に適した方法がある（中略）重要な点は，あとから切れたりしないよう，毛羽立たないように撚り繋ぐことである。（中略）糸績みをするときにもっとも重要なことは，根元に近い方と先端側という繊維のもともと持っている方向性を無視してはならないことである。（中略，「紡ぐ」の二つの意味について）１つは木綿や羊毛などの短繊維に用いるときで，これは細い繊維の集合体から繊維を少しずつ引き出すと同時に，紡錘車や糸車で撚りをかけ，糸にすることを指す。もう１つは〔長繊維という〕樹皮や草皮繊維の糸作りに用いるときで，日本各地では，すでに績んである繊維に紡錘車や糸車を用いて一斉に撚りをかけることを指して紡ぐと呼んでいる。

この論考の注目点は，「撚り繋ぐ」について繋ぐ部分を（二つに）裂いて，一方は次の糸と共にＺ撚りをかけ，もう一方にもＺ撚りをかけ，２本を合わせた所にＳ撚りをかけて繋ぐことで，「撚り繋ぎ」と「撚りをかけるとは別に扱われる。糸を撚り繋ぐとき，糸の方向性が同一であれば，作業時にも引っかかることがなく，毛羽立ちの少ない糸となるため，繊維は一定の方向性を保つことが重要である」と強調する。

塩谷（2002:1000-1001）は「撚りには，撚る方向によってＳ撚り（右撚り）とＺ撚り（左撚り）の２種類がある。撚った糸を上下方向に置いたときに，糸表面の繊維の方向が，文字Ｓの中央の斜め線と同じ方向に傾いている場合がＳ撚り，文字Ｚと同じ方向である場合がＺ撚りである（中略）強い撚りをかけた糸を強撚糸（きょうねんし），甘い撚をかけた糸を甘撚（あまより）糸，中間的な撚をかけた糸を並撚（なみより）糸という」とし，撚りをかける目的について「断面に丸みをもたせる，太さの班（むら）を平均化する，毛羽を防ぐ，織物にしたときの特殊な風合いや重厚感をもたせることなど」をあげ，糸に撚りを加えるには，器具を利用するほかに「円筒に糸を巻き付け，円筒の一端から糸を引き出すことによっても糸に撚りをかけることができる」とする。

３．樹木・草本の採集から織り糸とするまで ― 本州以南の事例から

長野・ひろい（1999）は日本の本州以南14カ所と東南アジア７カ所で樹皮と草皮の布と機（はた）について調査をしている。地点だけでなく，繊維の種類も数種あるが，アイヌの樹木衣と草皮衣に使用された種類に近いものを選定し，制作方法の比較を試みる。シナノキから作るシナ布

とイラクサ科の草から作るヤマソ織を選定した。糸の方向性を重視しているのが，記述にも反映されている。採集から織り糸となるまでの工程に限定し，すべて要約とした。なお，調査年の次（ ）はページ数である。

３．１．シナ布：雷（いかずち）（新潟県山北町），調査 1988 年，（104-110）

オオバシナ（オオバボダイジュ），コバシナ（シナノキ）だが，最適なのはオオバシナで樹齢 15～20 年くらい，太さは幹の根元の直径で 15～20 ㎝くらいのものを利用する。

1）シナノキ伐り，皮ヘギ（皮剥ぎ），モトシボリ：6 月下旬～7 月上旬。その後のシナの乾燥のために梅雨明けを待って行う。この時期を選ぶ理由は植物の生長が盛んなこの時期には樹液が多く，そのために材の部分を残して形成層のところから剥がしやすい。また，この時期をのがすと，表皮と木質部が密着して表皮を剥がすのが困難となる。

a. シナノキ伐り：下枝を切り落とし，根元から 60～70 ㎝は木が曲がっているために良い繊維がとれないので，そこを残して伐り倒す。そのあとは周囲から芽が出るので，中の良いのを 1 本残して枝打ちしながら育てると 20 年後には伐採できる。

b. 皮ヘギ（皮剥ぎ）：上の方まで枝を切り落とし，切り落とした後を丁寧に削ってなめらかにしておくと皮を剥ぎやすい。ハシナシナタ（端無し鉈）を使い 8 ㎝くらいの幅で根元から梢へ剥いでおくと根元から材と樹皮が見える。根元に近いところで，この木質部と樹皮の間へ木で作ったヘラを差し入れて力を入れてこじると，容易に皮を剥がし取ることができる。表皮は 1m ほどの長さに巻いて折らないように束ね，背負って持ち帰る。

c. モトシボリ：樹皮は元の方から 1m くらいの表皮を地面に押しつけて平たくし，元から 30～40 ㎝のところで内皮が内側になるように折ると，表皮の固い部分に割れ目ができるので，そこを両手で持ち表皮を足で踏んで，表皮と内皮を分離する。ここまでが男の仕事である。

2）乾燥，保管（シナ干し）： 6 月上旬～8 月下旬。内皮は外皮を剥いだ側が内側になるようにして根元を中心に 80 ㎝くらいに丸く巻き，細い皮でくくっておく。皮を折らないように注意する。5～7 日間くらい直射日光で十分乾燥させる。その後は，囲炉裏の上などのよく乾燥したところで保管する。

3）シナ煮，シナ揉み，シナ剥ぎ，シナ扱（こ）き：8 月下旬～9 月上旬。

a. シナ煮：繊維束だけを分離する。乾燥させて保管したシナ皮は，冷たい渓流や池に一昼夜ほど浸けて柔らかく戻し，木灰の灰汁を用いてアルカリ処理を行う。これをシナ煮と呼ぶ。煮あげ

るための木灰の量は灰の質によるが 7～8 時間を要する。灰の質とは灰のアルカリ性が強いかどうかである。ナラやブナなど硬い木の灰はアルカリ性が強く，スギなどの灰はアルカリ性が弱い。

b. シナ揉み：煮上がったシナ皮を分離しやすくし，シナ剥ぎの工程に備える。熱いうちに引き上げて横槌などでまんべんなく打ち，両手で 10 ㎝程間隔をあけて握り，両拳をぐるぐる回しながら，端から端まで揉む。

c. シナ剥ぎ：1 枚のシナ皮は 10 枚から 20 枚に剥がすことができる。長いものは経糸用に短いものは緯糸用にするのでこの段階で選り分ける。

d. シナ扱き：シナ煮の際に付着した灰を落とし，硬い靱皮以外の柔軟部分を抜き取る。掌に入るほどのコキバシ（竹製）を使い，川の中で根元部から梢部へとしごき落としていく。

e. シナ漬け，シナ干し：気温が低いと効果が薄れるため，9 月に行う。シナ煮によって淡紅色になった皮を糠の糖分が分解するときに出る炭酸ガスで漂白し，美しい黄白色に仕上げることにある。また，糠の成分によりシナ皮を柔軟にする作用も考えられる。木の樽にシナ皮と米糠を交互に入れて水を注ぎ入れ重しを置いて 2 日間置く。樽から出したシナ皮は，水をためた中ですすいで糠を洗い流し，日光に 2 日間ほど当てて乾燥させ，シナ皮 1 枚分くらいの分量の皮を揃えて元の方を一結びして束ねる。その後 2 日ほど陰干しし，シナ裂きまで保管する。

4）シナ裂き，シナオミ（シナ績み）11 月下旬～1 月上旬。

a. シナ裂き：皮から糸にする工程である。まず 12～13 ㎜に粗裂きし，次に 3 ㎜にくらいに細かく裂く。

b. シナオミ：細く裂いた糸を繋いでいく作業である。1 本目の終わり 5 ㎝程を 2 つに裂き，2 つに裂いた一方に次の 1 本を添わせ合わせて Z 撚りし，もう一方も Z 撚りする。この 2 本を S 撚りし，より合わせて 1 本にする。作業を終えると糸を丈夫にするために雪の上に並べて寒風にさらす。

5）シナヨリ（撚りかけ）：口に水を含んで霧を吹きかけ全体に湿り気を与えておく。糸車にかけて撚りをかける。経糸用の糸は糸車を 7～8 回転，緯糸用の糸は 2～4 回転して撚りをかける。S 撚りがかかる。

6）ワクウツシ（糸枠に移す）：糸枠は重い台に取り付け安定させておき，糸を枠に移していく。糸を移し終えると，枠を囲炉裏のそばなどの乾燥したところに並べて，シナヨリのときに湿らせていた糸を乾かす。撚りをかけた糸は，枠に巻いて乾燥させることではじめて撚りが落ち着

く。

ここまでの工程の特徴として，シナノキは通常 1 本立ちだが，一つの根株から数本の株立ちにしていることで，産業的に繊維を採るために若木を栽培する工夫がされている。シナノキは伐り倒し，皮を剥ぐが，皮は最後まで折らないように気をつける。1）c.モトシボリまでが男の仕事である。

３．２．ヤマソ織り：戸中（とちゅう）（新潟県佐渡市相川町），調査 1981 年，（119-124）

ヤマソ（山苧）は，イラクサ科のアカソ，ヤブマオ，ミヤマイラクサなどである。調査時点で織られているのは裂織である。1912 年生まれの調査者の姑はアカソの糸でカタピラ[7]と呼ぶ夏の衣料を織っていた。また，姑が績んだ糸で 1955 年頃まで織ったことがある。18 世紀半ば頃に西日本の古木綿布が入ってきて，これを細く裂いた紐を緯糸にした裂織りが織られるようになり，靭皮繊維の糸は，裂織りの経糸として用いられてきた。経糸は密度を粗くして，古木綿をしっかり打ち込み，サッコリ〔先織りの仕事着。モジリ袖で衽がなくアイヌのアットゥシと同じ形状〕を作る。ずしりと重いが冬の仕事着として温かく厳しい労働に耐える丈夫な衣料であった。

1）ヤマソ刈り：9 月下旬～10 月稲刈りが終わる頃。農閑期であることによる。7～8 月頃の水分を含んでいる時期の方が皮は剥ぎやすい。茎の太さは直径約 1 ㎝，草丈 70 ㎝前後に生長している。ヤマソの葉が落ちると茎が弱くなるので落ちないうちに刈り取る。鎌で刈り取りその場で葉をしごき落とし茎を折らないように束ね，蓆などに包んで背中に背負い家に持ち帰る。

2）乾燥，皮剥ぎ，ヤマソコキ

a. 乾燥：直径 5 センチくらいの小束に束ね，末の端から 20 ㎝ぐらいの所の 2 カ所を紐で縛る。日が当たり，風通しの良い場所を選んで，2～3 日間かけてよく干す。夕立などで濡れないように気をつける。

b. 皮剥ぎ：ヒキギ（細竹の直径 2 ㎝，長さ 50 ㎝ 2 本，40 ㎝ 1 本の 3 本を揃えて真ん中より少し下を紐でくくったもの）を石臼の穀物などを注ぎ入れる穴に差し込み，短い竹と長い竹の間に，ヤマソの芯を押しつぶすようにヤマソを 1 本入れ，元から末へと引き抜くと，芯と皮が剥がれやすくなる。剥いだ後，手元の 10 ㎝程の皮を末から元へと逆さに剥ぎ取る。その後，平たく丸い石の上に剥いだ皮をのばして木槌で軽く叩いてほぐすと，表皮の外側の外皮が剥がれて

---

[7] かたびら【帷・帷子】③夏に着る，生絹や麻布で仕立てた単衣。『広辞苑』

落ちる。

c. ヤマソコキ：竹ベラを使って表皮の外側の外皮をこそげ落とす（人により行わない場合もある）。オウミをするときまで陰干しして保管する。

3）オウミ（糸績み）1 月～3 月。直日光や風の当たらない屋内で行う。

ヤマソの皮を両手でよく揉んで柔らかくし，まず約 1 ㎝幅にオオサキ（大裂き）し，次に約 3 ㎜幅のコサキ（小裂き）にする。はじめの 1 本を取り，末の端から 10 ㎝くらいの所まで爪で 2 つに裂き，次の 1 本の元の端を歯でしごいて，細くすると同時に口の中で繊維を湿らせ繊維を柔らかくして撚りがかかりやすくなるようにする。これを裂いたうちの 1 本の端に添わせるようにして Z 撚りをかけて 1 本に撚り合わせ，もう 1 本にも　Z 撚りをかける。次にこの 2 本に S 撚りをかけて 1 本に撚り合わせる。経糸，緯糸とも同じ績み方であるが，緯糸は少し太めに績んでおく。

4）撚りかけ

績んだ糸は撚りかけの前に水に浸けて十分に湿らせておく。水からあげ，糸を糸車にかけていく。ツム（錘）の振動で水しぶきがかかるので左膝に布をかけて行う。糸車の車とツムには，糸が 8 の字状にかけられているので右手で車を時計回りに回すとツムは逆時計回りとなり，糸は S 撚りになる。撚りが十分にかかったら糸を切ってツムから抜き取る。経糸に比べ緯糸の撚りは少なめでよい。

5）カセカケ（枠かけ）：カセと呼ぶものは，木製の道具の「枠（かせ）」と作られた糸束の「綛（かせ）」の 2 種類ある〔枠は 2 本の棒の間に横棒を 1 本渡したもので，横棒を握りこみ 2 本の棒に交互に糸を渡していく〕。ツムから抜いた糸が湿っていてしなやかな間に枠にとる。1 綛（6 綛で経緯糸ともヤマソの 1 反の平織り物ができる）分になったときに糸を切り，まとめて結ぶ。綛の糸束は湿っているので乾燥させてから枠の枠から外す。

6）灰汁で煮る：3 月一杯で終えておく。釜に水を入れ堅木の木灰を加えてかき混ぜ，綛にしたヤマソ糸を沈めて均質に煮上げるために時々上下に返しながら約 3 時間煮る。煮上がったら川へ運び流水で灰汁を洗い流す。コキバシを使い元から末の方向へしごくと糸の表面に残っていた皮がとれ，糸はしなやかになる。このあと，米の研ぎ汁に 1 晩ないし 2 晩浸けておくと，研ぎ汁中の糠によって漂白されて白くなる。水気を切り，乾燥させる。

7）繰り戻し（枠に糸を移す）：糸にかけられた撚りを均質にする作業。綛になった糸を広げてカセバ（十字型のナガテ）にかけ，枠に巻き取る。一般的にはこのあと整経に移るが，戸中ではカ

セバから枠，枠から枠へと何度か繰り返し，糸にかかった撚りを平均にする。

ここまで述べてきたシナ布，ヤマソの糸にするまでの工程だけでなく，織り上げるまでの一連の作業は，他の仕事（主に農業）の合間に行われる。

４．アイヌの樹木・草本の採集から織り糸とするまで

４．１.「蝦夷生計図説六　アツシカル之部」[8]（東大本）翻刻[9]

〈オヒョウ樹皮の採取時期〉引用

> アットシを製するには，ヲピウ〔オヒョウ〕といへる木の皮を剥て，それを糸となし織事なり，またツキシヤニ[10]といへる木の皮を用る事あれとも，衣になしたるところ軟弱にして久しく服用するに堪さるゆへ，多くはヲピウの皮のミをもちゆる事也，（中略）ヲピウといへる木は，海辺の山には少なくして，多く沢〔深〕山窮谷の中にあり，夷人これを尋ね求る事，もっとも艱難のわさとせり，専ら厳寒積雪の頃に至りて，山中の遙路ことことくに埋れ，高低崎嶇たるところも平らになり，歩行なしやすき時をまちて深山に入り，幾日となく山中に日をかさねて尋る事也，其外夷人男女とも，平日何事につきても，山中に入る事あれは，いつも心にかけて此木を尋るをもて，その習いとす

〈原料採取及び製糸課程（要約)〉

1）ヲピウを探し得たときはことごとく皮を剥ぐ。

2）その表皮をとって中の糸筋の良いところを選び取る。

3）ヲピウの表皮をとった皮を指でいくつにも裂くときは，麻のように裂く。

4）糸にするには，そのままでは皮は強くて糸にし難いので，温泉に浸し柔らかくする。温泉の浅瀬に浸し，上に木をのせ，流れさるようにし，4〜5 日程つけ置き，その皮がよく柔らかくなるのを待って，温泉より出し，湯のあかをよく洗い流して日にさらす。これをアツヲンという。アツはアットシを織る木の皮をいい，ヲンは柔らかになることをいう。アツ柔らかになる事である。このように温泉に浸し，日にさらして，糸に裂くばかりにしたものを，アイヌは力

---

8 原著者の村上島之允（秦檍麿）は蝦夷地踏査を 1801 年に了えている。

9 北海道大学アイヌ・先住民研究センター古文書プロジェクト編（2014:42-48）以下「蝦夷生計図説」とする。

10 本田（2002:6）はハルニレのアイヌ語名チキサニ cikisani を指すと考えられるとする。

の及ぶ限り貯え置く。これは糧食の備えをすることと変わることはない。その皮を柔らかくするために温泉が無い地では常の池沼などに浸す事はあるが，皮は柔らかくなりにくいため，多くは遠方の地といえども必ず温泉のあるところに持ち行きて浸す。皮を剥ぎ取ることからこれまでの作業は男女ともに行うが，糸に作るより先は女子の業に限る。

5）アフンカル（糸を造る）：アツの皮をよくよく柔らかくして麻を績むように，いくつにも裂いて次第に繋ぎ，岐頭の木〔上部が二股になっている〕に巻き付ける。この糸を績むことは最も難しいことで，日数を要する。昼夜を分かたず，寸暇を分かたず，また旅行の時もアツの皮を持ち，夜間また休憩時にもこれを行う。

6）カタキ（カ-タマ-キ〈糸-玉-造る，の略）岐頭の木に巻いた糸を玉にし，織糸となる。

この記述で重要な点は樹皮の採集時期は厳寒の頃でオヒョウの皮はすべて剥ぐ。温泉に浸ける事で柔軟性を得る。糸を作る前までは男女ともに行う。糸の繋ぎ方ははっきりしない。

４．２．渡辺（1951:77-80），調査 1951 年，アサと樹皮衣の作り方

〈アサ：製糸用原料 mun 即ち所謂「アサを採る草」[11]のアサ糸の作り方〉（要約）

“アサ糸”は nipes シナの繊維の糸に比し耐久力の点で遙かに優る。haykina イラクサの採集は 9 月頃が選ばれた。近距離では女性が，遠距離では男性も加わる。製糸課程は次の通り。

1）炉火の傍で加熱して皮を剥ぎ，その皮を煮て繊維を分離する。

2）残雪上に放置すると漂白されたアサ糸が得られ，これを手で紡ぎ 2 本縒りの糸にし，巻いて保存した。製糸は女性の仕事として織布等と共に年中余暇をみて行われた。しかし，綿糸の入手が容易になってから手数の要るアサ糸は全く放逐された。

この論考の注目点は haykina イラクサの採集は 9 月頃，遠距離では男性も加わる。残雪上に放置するのは越後の雪晒しと同様の効果を得ていることになる。

〈樹皮衣〉作り方（引用）

at-ni オヒョウ。内皮繊維を attus の原料とす。主として春 3 月乃至 4 月頃樹皮を採取。nipes-ni シナに比し，樹皮が長く裂ける点，繊維がシナより繊維が弱いが柔軟な点等から

---

11 「アサを採る草」の種類は，hay オオバイラクサ通称カエグサ，nika-un-hay，kap-hay ムカゴイラクサ通称細いイラクサ，hay-kina 通称太いイラクサ，カエグサ。yuktopa-kina フッキソウをあげている。nika-un-hay はツルウメモドキ（木本）であり，ムカゴイラクサはミヤマイラクサと呼ばれる草本である。nika-un-hay の採集は 3 月頃が選ばれたと記述されている。

attus には専らこれが用いられた。

［原料採取及び製糸課程］

1）適当な木の根元をめぐり tasiro 山刀で樹皮に切り目を入れその一端を持って上方に引き剥がす。

2）剥いだ樹皮の外側を上にして手で折り，外側の折れ口を銜えて内皮を引き剥がす。

3）これを現場で乾燥し，束ねて持ち帰る。乾燥は重さの軽減と繊維の弱化防止に役立つ。

以下製糸並びに織布は女性に依る。

4）この課程では繊維の分離と同時に漂白或いは染色が行われる。漂白の場合は直接沼に浸し，1 週間乃至 10 日ほど放置，黒染には tun-ni カシワと nesko-ni クルミの樹皮の煎汁に 1 日ぐらい浸し次に湿地泥土中に 2-3 日間放置，赤染には kene-ni-kap ハンノキ樹皮を用い同上処理，淡赤褐色 ruhure に染めるには灰汁で数時間煮沸し取り出して天日で乾燥し，これを束にして随時糸に作られる。

5）at はそれを細く裂き 3 丈乃至 5 丈[12]の長さに継いでできる。

attus は夏用衣服として不可欠であったが冬期には不適でそれには ur 毛皮衣が当てられた。attus の自家消費は当地〔沙流川筋〕では明治初期乃至中期頃を境に激減し，主として綿布等との交換に切り換えられた。（中略）明治 30 年代極上品は自家用に供されることもあったが，その後 attus-kar は後を絶った。

この論考の注目点は，オヒョウの伐採は春 3 月 4 月頃に行い，内皮だけを持ち帰る。染色について記録する。漂白の場合は発酵処理，黒染めと赤染は高温処理，淡赤褐色染めはアクリル化処理となる。製糸及び織布は女性による。

4．3．知里（1953:163-164,166）の樹皮衣と草皮衣の作り方（共に引用）

〈樹皮衣〉

（楡皮採集は）春の雪解けの頃，北海道でわ男も女も，樺太でわ専ら男が，わざわざこれを採取するために山に出かけて行き，立木から剥ぐ。剥ぐ時わ木の神に酒や幣を捧げる。これを取る時にわ幹の根元に鉈目を入れ，それえ両手をさし込んで一気に上方え巻き上げるのである。但し，樹を裸にしないとゆう意味で皮の半分は剥がさずにおく。剥いだのわ

12　1 丈は尺の 10 倍，約 3m（『広辞苑』）とあり，9m～15mとなる。

取り，内皮だけ持帰って，北海道では温泉，或いわ沼，樺太では海水に浸して，そのまま十数日間放置しておく。するとどろどろになって繊維質ばかり残るから,それを水洗いして乾竿に掛けて乾かすのである。地名に「楡皮を浸しておく所」(at-wor-usi)とか，「楡皮を乾す所」(at-satke-usi）とかあるのわ以上の工程を示すものである。

美幌でわ，屈斜路湖畔の池の湯（at-horo-to オヒョォの樹皮を・浸けておく・沼）に持って行って，1 週間くらい浸けておく。それ以上浸けておけば腐れるからだめだとゆう。1 週間暗いで on して（やわらかくなって）一枚一枚半紙の様に剥がれる。ただの沼にも浸けることがある。これも 1 週間位。但し，温泉に浸けたものが白く出来上がるのに対して，沼に浸けたものわ出来上がりが黒っぽいとゆうことである。鵡川では，沼に 3 週間位浸けておくとゆう。

繊維わ，乾くと皮が一枚一枚薄紙を剥がす様に剥がれるから，それを細かく裂いて，一本一本指の先で縒りをかけながら繋ぎ合わせて，大盥の中に溜めて行き，それがいっぱいになったら，こんどわそれで糸玉を幾つも作っておいて，それから厚司を織りにかかる。

この論考の注目点は，皮剥ぎの時期は春の雪解けの頃にする。皮の半分は剥がさずにおき，内皮だけ持ち帰る。剥いだ皮は温泉，沼に浸ける。 樺太では海水に浸ける。温泉に浸けると皮は白くなり，沼に浸けた物は黒っぽく仕上がる。糸は縒りをかけながら繋ぎ合わせる。織りに取りかかる前に糸全体に縒りはかけない。

〈草皮衣〉

エゾイラクサから繊維を取るにわ，秋枯茎を採集して，二三日乾燥し，その茎を細く裂いて，一本一本裏返しに折ってわ皮から肉をそぎ落とし，その皮の根もとを揃えて，1 握りぐらいずつ束にし，一端を足に踏まえて両手の間で揉み上げて行き，こんどわ他の一端を踏まえてまた揉み上げて行く，とゆうぐあいにして，表皮を揉み落として行くうちに，繊維だけが手元に残るのである。この繊維で，糸を撚ったり，織物を織ったりするのである（幌別)。

樺太の白浦でわ，秋 10 月になるとこの茎が枯れてしまうので，枯れてしまった頃を見はからってそれを刈り取り，その枯茎から皮を剥がした。(中略）採集した皮わそのまま水に漬けておいて,「ピパカハ」pipa-kax“川真珠貝の殻”の縁で荒皮をはだけてそれから乾した。乾せたらそれを冬まで貯えておき，厳冬にそれを取り出して微温湯に浸して柔らかくし，何回も水を代えて，それを取り出して雪の上に置いて足で踏みつけて，それからま

た水に入れ，この操作を数回繰り返してから，竿に懸けて 10 日 20 日でも放置しておいて真白な繊維を得た。こうして得た真白な繊維を細くほぐして，女たちわ炉端で巧みな指さばきで糸に撚り，その糸を織器で布を織った。この布で仕立てた衣服を，「テタラペ」[13] tetara-pe と云った。「テタラペ」とは“白い・もの”の義。

この論考での注目点は，秋に枯茎を採集する。採集した皮は水に漬けておき，「ピパカハ」pipa-kax“川真珠貝の殻”の縁で荒皮を取り，乾す。乾したものを冬まで貯えておき，厳冬に微温湯に浸して柔らかくし，何回も水を代へ，取り出して雪の上に置いて足で踏みつける事を繰り返す。雪上で作業することで白い繊維を得る。糸の繋ぎ方に言及していないが，楡皮と同様の繋ぎ方である，縒りをかけながら繋ぎ合わせている事が考えられる。

続いて樺太での新産婦の祝を葛西[14]の引用で述べているが，「アイヌには特記するような祝ひ事はない。然し新産婦が赤ん坊を抱へて親戚知己を訪れた時は，厚司を織る原糸即ちモーセ（蕁麻）の繊維糸（ハイ）の一束を贈ることはある」と正しておく。

４．４．荒井・村中（1961:12-13,1963:21）1957，1959，1961 年の調査。（要約）

オヒョウは，樹皮を剥いで内皮繊維を取り，温泉，皮，沼等に浸して晒し，薄く細く裂いてつなぎ，わずかに撚りをかけながら糸を作る。

（平取 H 媼談）適当な木だと思えば男の人が全部剥ぐ。

アカダモ（ハルニレ）は，樹皮を剥ぎ，オヒョウと同様の工程によって作る。オヒョウに比べやや硬く，しかもあまり丈夫でない欠点がある。濡れると繊維が吸水して目が詰まり，水を通さなくなるので雨降りの時にも着用した。

シナノキは，（樹皮を剥ぎ）内皮繊維を取り，オヒョウと同様の工程によって作ると言われているが，調査したところでは，糸を造るとき撚りをかけない。オヒョウに比べ（糸が）硬く，あまり長くとれないのが欠点だが，強靱で採集が容易である点が優れている。

イラクサは，秋落葉した後にその茎を採集し，繊維を取り，撚りをかけながら糸とし，布を織り着用する。この厚司は他の厚司と比べると一段と色白く柔らかく丈夫である。従ってアイヌ自製の衣服の中で最も上等上品名物として喜ばれたが，その完成までには他のアツシの 10 倍も

---

[13] 博物館の図録には「レタラペ」,「レタラペ」の呼称もある。

[14] 葛西（1943:25）『樺太アイヌの民俗』

の労力を要したので，着心地や外見が良くても，オヒョウ，アカダモ，シナノキ等の入手しがたい樺太アイヌが用いた位で，その他の地域ではよほどでなければ使用しなかったようである。

（二風谷 N 翁談）：イラクサは（荒皮をはだけて乾燥した皮を）冬までこれを貯え，厳冬に取り出し，微温湯に浸し柔らかくし，何回も水をかえ，雪の上で踏みつけ又水に戻し，雪の上に出す。この操作を数回繰り返して竿にかけ，10～20 日放置し，真っ白な繊維をとる。

（鵡川 H 媼談）：イラクサの着物はかゆかった。

（芽室 K 媼談）：イラクサは（新産婦のお祝いに）着物を製作して贈ったり，又材料のまま贈ったりした。

この論考の注目点は，オヒョウの樹皮はすべて剥ぎ，温泉に漬ける。シナノキはオヒョウに比べ（糸が）硬く，あまり長くとれないが，強靱で採集が容易であるとする。ここからシナノキは株立ちをしていると考えられる。糸の繋ぎ方は次の 3 種である。オヒョウは薄く細く裂いてつなぎ，わずかに撚りをかけながら糸を作る。シナノキは撚りをかけずに糸を作る。イラクサは撚りをかけながら糸とする。イラクサは繋ぎながら撚りを懸けている可能性がある。H 媼の「イラクサの着物はかゆかった」は甘撚りであった可能性がある。イラクサの衣服の「完成までに他のアツシの 10 倍もの労力を要した」とするが，根拠は示されていない。

４．５．児玉（1969:250-254）採取から糸玉にするまでの工程（要約）

1）樹皮の採取から繊維への工程

〈オヒョウ〉

オヒョウの樹皮の採集時期の実際は冬から晩春（5 月中旬）で，1 本の木の半側分の皮を剥ぐ。内皮をできるだけ長くとるようにして内皮だけを持ち帰る。内皮は温泉か沼につけて柔らかくして繊維を取るが，すぐ温泉などにつけられない場合には，その内皮をそのまま充分に乾しておけば，半年でも 1 年でも保存できる。乾燥が不十分でかびがついたりすると使用できなくなる。温泉に浸けた場合は，普通 4～5 日から 1 週間と決まっているが，沼につけたときには，気候や沼の水温によって 10 日～3 週間ぐらいかかることもある。これをアツオンという。オヒョウを熟れさせるということである。内皮が水面から出ていると柔らかくならないので，様子を見て上下の位置をかえたりし，手で加減をみて柔らかくなって 1 枚ずつ剥がれるようになるまで待つ。沼につけるときには白かった内皮が茶褐色の繊維になる。1 枚ずつ剥がれるようになった内皮には，糊状の透明なぬめりが付着しているので，皮の流水で，水の中でぬめりをしごくよ

うにして落としながらもみ洗いをすると，内皮は薄紙のように剥がれてくる。水洗いをよくしないと，乾燥したときに，全部がくっつき繊維としての価値がなくなるので充分に行う。充分に水洗いした繊維は 1 枚ずつに分けながら竿にかけて乾燥する。すっかり乾燥した繊維は，やわらかな手ざわりのよいものになる。

〈シナノキ〉

シナノキの樹皮を剥がす方法はオヒョウと同じだが，剥がす時期は夏になってからでも剥がしている。外皮と内皮を分ける仕事は，オヒョウより簡単にできるが，経糸と緯糸では製法が異なる。

・経糸を作る場合：皮剥ぎをした内皮を半日ぐらい天日に干してから釜で煮る。水から煮て，煮立ったら木灰を入れて煮て柔らかにする。煮上がったものは水洗いをしてぬめりを落として竿にかけて乾燥させる。茶褐色の丈夫な糸ができる。これをチポプテニペシ，我々が煮たニペシという。

・緯糸を作る場合：内皮はオヒョウと同じようにして沼にさらして繊維にする。時季としては真夏の気温の高いときが良いので，7 月の土用の頃が最もよい時とされている。つける期間は 10 日前後である。沼から上がったものは白くて柔らかい糸になるので，織るときには軽く撚りがかけられる程度になる。この糸をオンニペシという。熟させたニペシという意味である。

〈ツルウメモドキ〉

繊維の採取は時季は 12 月末から 3 月までの冬期である。つる状の枝を採取し，1 本ずつ縦に半分に割り，樹皮を木質部から分離し，樹皮を外皮と内皮に分ける。内皮を熱湯に数分間漬ける。熱湯からあげた内皮は濃い緑色となる。それを戸外に出して雪の上で 2 週間ぐらい置く。雪がないときには，竿にかけたまま 4 週間ほど放置しておけば白い繊維になる。

〈エゾイラクサ〉

採取の時季は秋おそく，枯茎をとり，2～3 日乾燥させてから茎を細くさいて，裏側に返し，皮から肉をそぎ落とし，皮の根元を揃えて一握りほどの束にして，一方の端を足で踏んで束を抑えて，その束を両手でもみ上げてゆき，上までもんでから，束を逆にして反対側を踏んで押さえてもみあげる。これを何度も繰り返して表皮をもみおとして繊維をとる。

〈ムカゴイラクサ〉

採取の時季は秋おそく茎が枯れてきてから，茎を刈り取り乾燥し，小さな束を作り，槌で打つと表皮と内部の髄が粉々になって落ちて，内皮の繊維だけが残る。

2）糸つむぎ

〈オヒョウ〉

乾燥した繊維を 0,2～0.3 ㎝ぐらいにさき，糸と糸とをはたむすび（機結び）に結んでつなぎ，長くしていく。その糸に撚りをかけながら結んで長くしていくのだが，撚りはあまり強くかけず，さいた糸が丸くなる程度で，この撚りをかけたもので織るのが丸織りといい，撚りをかけずさいたままで織るのが平織りという。糸を結んだ結び目は，余分な糸は切り落とし，結び目は噛んで潰しておき，糸玉を作る。撚りをかけることをノエ，はたむすびをエウコテという。

〈シナノキ〉

裂き方はオヒョウに同じだが，糸を結ぶときに濡らして柔らかくしてから仕事をする。硬くて撚りがかけられないので平織りだけである。

この論考の重要な点は，樹皮の採取から糸にするための工程が樹皮により異なることが述べられている。シナノキの採取は夏でもよいこと，外皮と内皮を分けるのはオヒョウよりも簡単にできるが，内皮の処理方法は経糸と緯糸では異なること，糸は機結びで繋ぐ。（オヒョウの）織りの種類は，糸の撚りは強くない程度にかけながら結び長くしていくものを丸織り，裂いたままで織る平織りの 2 種類がある。

4．6．山本・知里（1970:221-224）樺太アイヌの樹皮と草皮の扱い（要約）

オヒョウ楡の皮の厚司オピゥ・アハルシopiw-axrus は繊維を剥いで，そのまま使うが，イラクサの厚司は，一旦糸に撚ったものを用いて織るから特に ka-axrus「糸・厚司」という。カー・アハルシka-axrus〈ka-at-rus は haymose オオバイラクサの茎の内茎から繊維を得て真白く美しい厚司を作る。この故にオピゥ・アハルシと較べてテタラペ（tetarape「白くあるもの」）といって樺太アイヌは男女とも多くこれを着用していた。

〈オピゥ・アハルシ〉

オヒョウの内皮を 5 月末頃，男性の手によって剥ぎ，7～10 日間程塩水に浸けて置くと，とろとろとした繊維質になる。それを乾し，下記テタラペの如く撚らないで，夏中に織機によって反として，冬期に厚司に仕立てる。（中略）テタラペほど多くは使用しなかった。

〈カー・アハルシ〉

haymose オオバイラクサ 10 月頃採取して皮を剥いで乾し，冬まで貯えておき，越年になって水に漬けて柔らかくして，さらに雪中に埋めて晒して白い強靱な繊維を得る。これを女達は炉ば

たで肩からこれを巧な手つき，指さばきで撚る。この糸を織機にかけて布を織り，出来上がった布を衣服に仕立てる。

この論考の「オヒョウは繊維を剥いでそのまま使う」は判りづらいが，知里（1953）の「糸は縒りをかけながら繋ぎ合わせる。織りに取りかかる前に糸全体に縒りはかけない」ことから，織りに取りかかる前に糸全体に撚りをかけず，イラクサは糸全体に撚りをかける，と区別していると考えられる。

４．７．萱野（1978:34-37）樹皮衣の作り方（要約）

1）オヒョウは冬期間を除いていつでも剥ぐことができる。直径 20 ㎝くらいで節や枝の少ない物を選ぶ。皮の一部を剥ぎ噛んでみてぬめりの少ない物を選ぶ。根元の方へ鉈やタシロで皮に切れ目を入れ皮の端を両手で持ち下から上へ剥ぎ上げる。1 本の木の 4 分の 1 くらいずつ剥ぐ。

2）その場で外皮を剥ぐ。内皮を内半分に折り，その折れ口を向こう側に向けて両手で挟んでよじると外皮と内皮が分かれるので，外皮の方を歯で銜えて剥ぎ取り，内皮だけを背負って持ち帰る。

3）夏はそのまま沼に浸けて潤かす。春や秋は一旦乾燥させておき，夏になるのを待って沼に浸ける。沼に浸けて 3 日目くらいから状態を確かめ，皮が 1 枚 1 枚薄く剥がれるようになった時に沼から引き上げて，きれいに水洗いをして干す。干し上げた皮は湿気の少ないところに保存する。

4）保存した皮に水をかけてさっと湿りを与えてから，指先で細く裂き。その糸に撚りをかけながら機（はた）結びで長く繋いで行く。

5）繋いだ糸はカタク（糸玉）にする。

6）糸を染める場合：赤染にはケネ（ハンノキ）の皮を剥いで鍋で煮立て煮詰めてオヒョウの木の皮を浸す。黒染にはネシコ（クルミ）の皮を剥いでケネと同様に皮を浸すと灰色に染まるので，鉄分の多い谷地沼の泥の中に 3～5 日間浸けておき，取り出して水洗いすると黒に染め上がる。直射日光に当てて乾燥させて使う。

この論考での樹皮を剥ぐ量は 1 本の木の 4 分の 1 程度である。内皮だけを持ち帰る。樹皮は沼に浸ける。染色方法について述べる。特徴の一つは糸の繋ぎ方で，機結びをする。アイヌ文化

生活再現マニュアル[15]には結び方の図解がある。第二にはオヒョウの伐採時期で冬期以外いつでも剥ぐことができるとしていることである。

4．8．織田ステノさん（静内）の“シナノキでゴザの編糸を作成する方法”[16]を映像から見る

シナノキの樹皮は新芽が出る頃に採取する。剥ぎ取り後の木の処理について言及していない。外皮を剥ぎ取り，内皮だけを持ち帰る。内皮は真ん中を縛り沼に浸け，水面から出ないように上に枝などを置く。沼に浸ける期間は 1 週間位から剥がれるのが普通であるが，ここでは 15 日目に沼から取り出している。取り出した内皮のぬめりを小川でとり，竿にかけて干す。干しあがった内皮を一定の幅に細く裂く。細く裂いた内皮の数本を束にしたものを 2 つ用意し，撚り合わせて 1 本に撚っていく。木灰を付けながら撚ると撚りがかかりやすく太さも一定する。しっかりと撚る。糸尻の内皮が短くなると内皮を継ぎ足して糸撚りを続け（結んでいない），撚り終えると糸玉にする。

織田と 1 年間起居を共にした計良（1995:99）は「（シナノキ）立木のままで剥ぐときは，幹の二，三割の幅を縦に剥ぎ取り」と記している。奥田（1995:198）は織田さんに直接聞いた話として,「シナの木の皮を剥ぐときは立木のまま丸々剥いで，剥いで裸になった木を切り倒しておく」と教えを受けたこと，その点を計良氏に確認したところ，織田さんから聞いたやり方ではないということである。樹皮は剥ぎ取り後，表面から見ると樹皮は見えず角度を変えた状態で樹皮が見える様に思えたが，剥いでいる木の隣に真新しい切り株があるので，伐り倒していると考えられる。剥ぎ取ってから伐り倒すので，樹皮は根元から枝先へ剥いでいることになる。

内皮を沼に浸ける時は真ん中を縛っているので繊維の方向性は考慮していない，内皮の数本の束にしたものを撚る。これはゴザ編糸にすることと関連している可能性がある。糸は繋ぎながら木灰を付けながら撚るのが特徴である。

4．9．遠山サキさん（浦河）への聞き取り，原田（2017:153-155）による[17]（要約）

カイカは糸を撚ること。親指と人差し指で撚りながら糸にしていく。（木の）皮とか草の繊維

---

15 「織るー樹皮衣―」財団法人 アイヌ文化振興・研究推進機構編

16 「静内川・アイヌのくらし　民具と織物」（1982）。以下織田（1982）とする。

17 以下遠山（2017）とする。

が足りなくなったら途中で足し増しする。歩きながらでもできる。

シナノキは，山の中に密集している木。オヒョウは家の庭に生えている木。シナノキ，オヒョウの皮を剥がすのに適しているのは 5 月，6 月。今（聞き取りは 11 月）は木が眠っているからいじらない方がいい。シナノキは 1 本伐り倒すが，オヒョウは太いから親木は残し，枝だけ切り落とす。シナノキは枝先から剥がし，オヒョウは枝の根元から剥がす。

シナノキ，オヒョウの皮の扱い方は，皮は水に浸して柔らかくなったのを畳み，そのままドラム缶で 1 日～2 日煮る。火は消さないように注意する。煮えたものは見たらわかる。煮えた皮は 1 枚つまむと皮の間に指が入るくらい柔らかくなっている。煮えた皮は火ばさみであげて，畳んであるまま足で踏んで柔らかくする。その皮をシートにくるんで川に持って行き，川の水で流し洗いをする。その際には，御神酒を持って川のカムイにカムイノミをしてから流し洗いをする。洗い終わったら干し竿に下げて，雨に当てないように大事に乾かす。その後湿気ないように紙の袋に包んで保管する。この状態で何年たっても使える。

皮から糸にする：ぬるま湯に 1 時間ほどつけると皮がめくれてくるので 1 枚ずつ指を入れて繊維に添って引っ張って剥がしていく。薄くなった皮を干し竿にかけて乾かす。この状態で引っ張って，切れなかったら丈夫だ。この状態で 1～2 ヶ月は大丈夫。カビが発生しないように大事に保管する。この皮を細い糸になるように繊維に添って割いて，カイカに使う。カイカした糸から着物もバッグも帯も何でも作る。着物は弾力性があって強いオヒョウを使って主に作る。シナノキでも着物は作れるけど，切れやすいから。昼も夜も寝ないで織っていっても 1 ヶ月はかかる。

イラクサは，山の沢のようなじめじめした所にある。丈夫である。採る時期は 9 月，10 月。家の庭に広げて立てておくと，天日で 4，5 日で乾く。葉がついていれば軍手をはめて落とし，棒状にし，木槌で擦るかシートに包んで足で踏みつけると皮の外側の皮が取れて行く。上からぱーっとお湯をかけて湿らせると中から細い繊維が取れる。その繊維がイラクサの繊維である。糸を引っ張ったら指が切れるくらい強い。その細い糸を何本も寄せてカイカする。

遠山の樹皮の採取について，シナノキは伐り倒すが，オヒョウは枝だけ切り落とすことが大きな特徴である。また，シナノキは枝先から剥がし，オヒョウは枝の根元から剥がすという点が強調されている。

写真には，遠山家の庭先にオヒョウが垣のように連なっている様子がうかがえる。オヒョウの入手に不自由はせず，シナノキは山に取りに行く。繊維が足りなくなったら途中で足し増し

するときに，繋ぎながら撚りを入れていき，結びはしていない様子である。イラクサの糸は色んなのに使えると言うが，着物を作るとは述べていない。

5．考察

樹皮を剥ぐ，剥いだ皮の処理，糸を採る，糸の繋ぎ方，撚りなど，織りに入る工程まで項目ごとに特徴をあげ，考察する。

《樹皮を剥ぐ時期》

樹皮を剥ぐ時期は「蝦夷生計図説」厳冬期，渡辺（1951）春 3－4 月頃，児玉（1969）5 月中旬，知里（1953）春の雪解けの頃，織田（1982）新芽が出る頃，萱野（1978）は冬期以外いつでも剥ぐ。樹皮を全部剥ぐのは「蝦夷生計図説」のオヒョウで，織田（1982）と遠山（2017）はシナノキを全部剥いでいる。オヒョウを半分程度剥ぐのが知里（1953），児玉（1969）で，萱野（1978）は 1/4 程度剥ぐ。樹皮の持ち帰りは全て内皮のみである。

厳冬期に樹皮を剥ぐのが「蝦夷生計図説」で，渡辺（1951），知里（1953），織田（1982），遠山（2017）は春であり，これから生長期に向かう時期と重なる。新潟県雷では，シナノキ伐りは乾燥のために梅雨明けを待つ意味もあり，6 月下旬～7 月上旬に行われる。この時期を選ぶ理由は植物の生長が盛んなこの時期に樹液が多く，形成層のところから剥がしやすく，また，この時期をのがすと，表皮と木質部が密着して表皮を剥がすのが困難となる事による。北海道は梅雨がないことから樹皮の乾燥時期は新潟より早くても不都合はないと思われる。「北海道産木材データベース」[18]によると，オヒョウ・ハルニレは北海道の高木では開花・結実がもっとも早く，時によってはヤチダモが開葉する前に翼果が落ちる。春先の方が見つけやすいことと思われる。萱野（1978）の「冬期以外いつでも剥ぐ」は，休眠期に向かう時期も含まれているので疑問が残る。

遠山（2017）は，シナノキは枝先から剥がし，オヒョウは枝の根元から剥がすという点が強調されている。長野・ひろい（1999）の糸の方向性を重視するのと同じである。織田（1982）はシナノキを根元から剥ぐ。

樹皮はどの程度剥ぐのが良いのか，それとも伐り倒すのか。先の「北海道産木材データベース」によると，最大でオヒョウは高さ 25m:太さ 1m，ハルニレは高さ 30m:太さ 1.5m，シナノ

---

[18] 地方独立行政法人 北海道立総合研究機構森林研究本部 林産試験場

キ，オオバボダイジュは高さ 20m:太さ 1m になる。織田（1982）のシナノキを剥ぐのは大きく生長したものではなく，新潟県雷の，シナノキは樹齢 15～20 年，太さは幹の根元の直径で 15～20 ㎝程度のものを伐り倒すのと同程度に見える。また，同じ地点に何本も幹が立っていることから，同様に株立ちにしていると想定できる。荒井・村中（1961）が「オヒョウに比べ（糸が）硬く，あまり長くとれないのが欠点だが，強靱で採集が容易である点が優れている」というのはこの点であろう。名久井（1993:225）は「一旦樹皮を剥ぐとその木は枯れるところから，ある程度の太さの幹から樹皮を剥ぐ実験は事実所困難」とする。白樺のように着火剤や松明の用に供され表皮の復活も早い木もある。樹皮が鹿の食害などで損壊された場合，一部だけでも樹皮が残るとその木はかろうじて生き残るが樹皮の復活には長い年月を要する。筆者が亜高山帯で観測を続けて 10 年を経た木は直径 10-15 ㎝程であるが，樹勢・樹皮に変化は見られない。大木であればなお長い年月を要することを考慮すると，シナノキだけでなく，オヒョウも「蝦夷生計図説」のように全ての皮を剥ぎ取り，更新を待つのが良いと考える。

《樹皮の処理》

処理方法の第一段階は，資料により異なる。「蝦夷生計図説」は温泉に浸し，柔らかさを得る。渡辺（1951）は漂白の時は沼に浸ける。黒染にはカシワとクルミの樹皮の煎汁に 1 日ぐらい浸し次に湿地泥土中に 2～3 日間放置，赤染にはハンノキ樹皮を用い同上処理，淡赤褐色に染めるには灰汁で数時間煮沸し取り出して天日で乾燥する。知里（1953）は温泉に浸けて白さを得，黒っぽく仕上げるときは沼に浸け，樺太では海水に浸ける。児玉（1969）は温泉か沼，萱野（1978），織田（1982）は沼に浸ける。荒井・村中（1961 他）は温泉に漬ける。遠山（2017）は温熱処理をする。沼に浸けて白さを得ているのが渡辺（1951），黒っぽい色を得ているのが知里（1953），萱野（1978）は色に触れていないが，この仕上がりの違いは沼の成分が異なることによるものであろう。発酵法，高温蒸気法，薬品法（アルカリ），などが必要とされ，適宜用いられており，糸撚りの段階でも木灰を利用している。内皮に付着したぬめりの除去は繊維としての価値に関わるものである。川などの流水でしごくように落としていくのだが，この作業は，他に変わる方法はなく，根気を要するものと思われる。

《草皮》

渡辺（1951），知里（1953），荒井・村中（1961 他），遠山（2017）の四者共に秋の茎が枯れた頃に採集する。遠山（2017）は触れていないが三者は糸作りの過程で雪に晒し，白い繊維を得ている。樺太では荒皮を「ピパカハ」pipa-kax“川真珠貝の殻”の縁でこそげ取る。

草皮の処理は，水または微温湯に浸し柔らかくし，足で踏んで揉む，これを繰り返す。草皮は雪を利用して白さを獲得する。

《糸を績む：糸の撚り繋ぎ，縒り繋ぎ，撚りをかける》

オヒョウについて 知里（1953）は糸に縒りをかけながら繋ぎ合わせる。織りに取りかかる前に糸全体に縒りはかけない。荒井・村中（1961 他）オヒョウは薄く細く裂いてつなぎ，わずかに撚りをかけながら糸を作る。シナノキは撚りをかけない。織田（1982）は糸を撚るときに木灰を付けながら撚ると撚りがかかりやすく太さが一定するとし，撚り繋いでいる。遠山（2017）は繊維が足りなくなり途中で足し増しするときは，繋ぎながら撚りを入れていき，結びはしていない様子である。

イラクサについて知里（1953）は糸の繋ぎ方に言及していないが，楡皮と同様の繋ぎ方で，縒りをかけながら繋ぎ合わせていることが考えられる。遠山（2017）はイラクサの糸は色んなのに使えると言うが，着物を作るとは述べていない。

縒り繋ぎは[19]「1 本目の終わり 5 ㎝程を爪などで 2 つに裂き，2 つに裂いた一方に次の 1 本を添わせ合わせて Z 撚りし，もう一方も Z 撚りする。この 2 本を S 撚りし，より合わせて 1 本にする」ことである。織田（1982）は内皮を数本ずつ束にしたものを 2 つ用意するので，2 つに裂くことはしていない。また，織田（1982）は撚るときに木灰を付けて撚ると撚りがかかりやすく太さが一定するという。

オヒョウなどの樹皮とイラクサなどの草皮の糸の繋ぎ方について，四者に共通するのは糸を撚り繋ぎすることである。児玉（1969）と萱野（1978）は機結びである。機結びは和裁，編み物で糸を繋ぐのと同じ結び方である。

糸は織りにかかる前にカタキにしているが，塩谷（2002）の「円筒に糸を巻き付け，円筒の一端から糸を引き出すことによっても糸に撚りをかけることができる」ことから，甘撚糸となっていることが考えられる。

《なぜオヒョウのような木本植物の靱皮を繊維としたのか》

北海道アイヌは「なぜオヒョウのような木本植物の靱皮を繊維としたのか」を解明することを目的として，樹木の選定から樹皮の採取，草皮の採取，そして樹皮から繊維，糸への工程を見てきた。特に「糸を績む」工程に注目して論を進めてきた。糸が短ければ糸を績み，縒り繋ぐ回

---

19 長野・ひろい（1999）

数は多くなる。株立ちのシナノキはオヒョウほどの長さは取れないが，イラクサ類の糸は 1m～1.5m程度，オヒョウの繊維の長さは 10 倍程度となることから糸を繋ぐ回数も 10 倍程度となる。荒井・村中（1961 他）のイラクサの衣服は「完成までに他のアツシの 10 倍もの労力を要した」の根拠は，この糸の長さに起因するものであろう。この 10 倍の労力こそ北海道アイヌがオヒョウのような木本植物の靱皮を繊維とした要因であると思量する。

糸は縒り繋いだのか，結んだのか。これまで博物館，美術館に収蔵されている資料を「糸を績む」という観点から見てきていない。今後はそれらの資料を新たな目で見，検討を重ねていくことを課題とする。

【参考文献】

荒井純子・村中智恵子（1961）「アイヌ民族の衣生活について」,『東京家政大学研究紀要 Vol.2』東京家政大学

荒井純子・村中智恵子（1963）「アイヌ民族の衣生活について（第二報）」,『東京家政大学研究紀要 Vol.3』東京家政大学

大沼亥久三，薄墨正，徳永邦雄，中嶌正志（1980）『繊維　新訂版』東京電機大学出版局

奥田統己（1995）「織田ステノさんのこと」，計良智子『アイヌの四季―フチの伝えるこころ』明石書店

葛西猛千代（1943）『樺太アイヌの民俗 樺太廳博物館叢書 9 』樺太文化振興會（1975 復刻版『樺太アイヌの民俗』みやま書房）

河原豊（2004）「1　繊維材料とその製造」，社団法人繊維学会編『繊維便覧　第 3 版』丸善

萱野茂（1978）『アイヌの民具』,『アイヌの民具』刊行運動委員会

計良智子（1995）『アイヌの四季―フチの伝えるこころ』明石書店

児玉マリ（1969）「アツシの材料，機織および仕立」，アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌』第一法規出版

佐々木利和（2001）『アイヌ文化誌ノート』吉川弘文館

塩谷正俊（2002）「撚り」，本宮達也他編『繊維の百科事典』丸善

「静内川アイヌの暮らし」（1982），『アイヌ文化伝承記録映画　ビデオ大全集シリーズ（2）道央部の川を巡って　第 4 巻』（財）アイヌ無形文化伝承保存会

下中直人編（2007）『世界大百科事典 13』平凡社

新村出編（2018）『広辞苑第 7 版』岩波書店

知里真志保（1953）『分類アイヌ語辭典 第一巻 植物篇』日本常民文化研究所

知里真志保・山本祐弘（1979）「第一章　コタンの生活」，山本祐弘編著『樺太自然民族の生活』相模書房

中川裕（1995）『アイヌ語千歳方言辞典』草風館

長野五郎・ひろいのぶこ（1999）『織物の原風景―樹皮と草皮の布と機－』紫紅社

名久井文明（1993）「東日本における樹皮利用の文化：加工技術の体系と伝統」，『国立民族学博物館研究報告 18 巻 2 号』国立民族学博物館

北海道大学アイヌ・先住民研究センター古文書プロジェクト編（2014）『ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所蔵 田藩文庫旧蔵「東蝦夷彙考」翻刻・解題―北海道大学アイヌ・先住民研究センター古文書プロジェクト報告書 2 ―』，北海道大学アイヌ・先住民研究センター

本田優子（2002）「近世北海道におけるアットゥシの産物化と流通」，『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要第 8 号』北海道立アイヌ民族文化研究センター

山本祐弘・知里真志保（1970）「樺太アイヌ民具」，山本祐弘『樺太アイヌ・住居と民具』相模書房

渡辺仁（1951）「沙流アイヌにおける天然資源の利用」，『季刊民族学研究第 16 巻第 3-4 号』日本民族學協會

（財）アイヌ文化振興・研究推進機構編「アイヌ文化生活再現マニュアル 織るー樹皮衣ー」アイヌ文化振興・研究推進機 https://www.frpac.or.jp/manual/files/2000_02.pdf

原田若菜(2017) 「森の名人 アイヌの手仕事の伝承　自然に感謝し共に生きる～アイヌって素晴らしい！～」，『「森の名手名人」平成 28 年度聞き書き作品「聞き書き甲子園」』公益社団法人北海道森と緑の会
http://h-green.or.jp/news/wp-content/uploads/2017/09/kikigaki1.pdf

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 森林研究本部 林産試験場「北海道産木材データベース」http://www.fpri.hro.or.jp/gijutsujoho/doumoku-db/doumoku/doumoku-index.htm

（さとう　まさこ）

Bark clothes and Grass fiber clothes of Ainu

SATO Masako

Summary:

In this paper, I clarify why Hokkaido Ainu have created and worn bark clothes, not grass fiber clothes. Bark clothes are woven out of bast fibers of arboreous plants. Elm trees, their main materials, are not easily collected, since they grow only in deep mountains. On the other hand, grass fiber clothes are woven out of bast fibers of grasses. Nettle grasses, their main materials, are easily collected in a wide indigenous area. However, while Ainu wear grass fiber clothes mainly in Sakhalin, Ainu wear bark clothes mainly in Hokkaido despite of the difficulty of collection. I solve this puzzle by focusing on the detailed process from collecting the materials to making them into yarns.